

み

みること(鑑賞)で 鍛えるそれは 世を見る眼

Keyword : みる, 五感覚総動員, なにもみる

「美術」は多くの人々にとっていまだに「かく・つくる」ことであり「みる」ことが極めて創造的かつ純粋な美術活動であるなどの認識はおおかたないようです。従前の美術教育において「みる」ことを軽視してきた当然の結果とも言えます。

とはいえ近年、学習指導要領等でその位置づけが整理されたこともあり、徐々に各学校等での取り組み状況は好転しています。

しかしそうした動きが最終的に美術教育の目的の達成につながるのかということになると私は決して楽観していません。すなわち教師のイメージに沿って「かかせる」、「つくらせる」ために「みさせる」という「表現のための鑑賞」の文脈があとをたたないからです。

私は「みる」という営みを通して「感じる力」、「考える力」が形成されるところにこそ本来の「鑑賞の指導」の意味があると考えています。このことへの合意があれば、「鑑賞のための鑑賞」や「鑑賞のための表現」という「鑑賞の指導」の内容の進化(深化)も期待されるのではないのでしょうか。この文脈の延長線上にはじめて「しっかりみる」姿勢が形成されていくと私はとらえているのです。現状はいまだ道遠しと言わざるをえません。

でも「しっかりとみる」とはどういうことなのでしょう。乱暴な言い方をすれば「五感覚(自分の持っている全感覚)を総動員してみる(五感覚総動員鑑賞)」ことです。もとより私は、目で「見る」ことだけが「みる」ことだとは考えていません。かつて第4学年の触覚表現題材「手を目にしよう(1980)*1」を開発(ね(P age28))し、その際の子どもたちの姿からこのことを確信しております。



写楽 de 自画像/学生作品



フェルメール de 自画像/学生作品



ピカソ de 自画像/学生作品

*1 「よい図画工作科授業を創る題材開発(広島大学附属東雲小学校研究会著) 明治図書、1981年6月、pp99~103